



我が國ニ於ケル土地所有權ノ移動(1)

高岡, 熊雄

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 31(1):1-24

(Issue Date)

1921-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053330>



商業學
經濟學
國民經濟雜誌 第三十一卷 第一號
(大正十年七月一日發行)

論
說

我が國ニ於ケル土地所有權ノ移動 (其二)

北海道帝國大學教授

法學博士
農學博士
高岡熊雄

一

余ハ曩キニ本誌第十卷第四號ニ於テ今研究ヲ試ミントスルモノト同一ノ題目ノ下ニ、農商務省ガ道府縣農會ノ手ヲ經テ調査シタ耕地所有ノ廣狹ニ依リ區別シタル農家戸數ト題セル明治四十一年及ヒ同四十二年度分ノ資料ヲ基トシテ一論文ヲ草シタ。續テ「金井教授在職二十五年記念社會政策」中ニ又同一問題ヲ採リ、明治四十一年ヨリ大正二年ニ至ル滿五ケ年間ニ於ケル土地所有權ノ移動ヲ研究シタ。

今余ハ等シク農商務省ノ調査資料ニ依リテ明治四十一年ヨリ大正七年ニ至ル滿
 拾ケ年ニ我ガ國ニ於ケル土地所有權ガ如何ニ移動シタルカヲ論究シヤウト思フ。
 此ガ本問題ニ關スル研究ノ第三報デアル。研究資料タル農商務省ノ出版スル農
 會調査農事統計ノ價值ニ就イテハ世間ニ種々ノ批判ヲ試ムルモノアリ余モ亦其
 ノ調査方法及ビ其ノ結果ニ關シテハ從來ノ研究ニ於テ多少意見ヲ述べ置キタル
 モ今尙當局者ハ依然トシテ舊套ヲ追フテ何等改善スル所ナキハ實ニ遺憾ニ感ズ
 ル次第デアル。然シナガラ他ニ適當ナル資料ガ提供セラレザル限り、之ヲ基トシ
 テ論究スルヨリ他ニ方法ガナイ。以下論述スル處ハ昨年七月岡山縣農會及ビ大
 原獎農會ガ聯合シテ主催シタ農事講習會ニ於ケル講演ノ一部ニ訂正ヲ加ヘタル
 モノデアアル。

二地主ノ數

(一)

全 國	地 主 數	比 例 數	増 減
明治四十一年	四、九三六、七六九戸	一〇〇、〇〇	
四十二年	四、九一六、四四三	九九、五九	(一)
			二〇、三二六

四十三 年	四、九三三、三九九	九九、九三	(一)	一六、九五六
四十四 年	四、九〇三、八六六	九九、三三	(一)	二九、五三三
大正 元年	四、九〇三、二五八	九九、三二	(一)	六〇八
二年	四、八九八、六六三	九九、二三	(一)	四、五九五
前半 期			(一)	三八、一〇六
大正 三年	四、八七三、三九五	九八、七二	(一)	二五、二六八
四年	四、八七〇、三三三	九八、六五	(一)	三、〇六二
五年	四、八五八、八二九	九八、四二	(一)	一一、五〇四
六年	四、八四三、一六七	九八、一〇	(一)	一五、六六二
七年	四、八六三、三七六	九八、五一	(一)	二〇、二〇九
後半 期			(一)	三五、二八七
自明治 四十一 年至大 正七 年			(一)	七三、三九三

我が國ニ於ケル地主ノ數ハ明治四十一年ニハ四、九三六、七六九戸ナリシガ、其ノ後ノ十ケ年間ニ明治四十三年ニ一六、九五六戸及ビ最近即チ大正七年ニ二〇、二〇九戸ヲ増加シタル外、他ノ八ケ年ハ常ニ其數ヲ減少シタ。其ノ最モ多キハ明治四十四年ノ二九、五三三戸デ最モ少ナキハ大正元年ノ六〇八戸デアッタ。明治四十三年ト大正七年ノ二ケ年ノ増加數ヲ差引キ既往十ケ年間ニ絶對的ニ減少セシ地

主ノ數ハ七三、三九三戸ニシテ一ケ年平均七、三三九戸ノ減少デアル。此等増減ノ結果大正七年ノ地主總數ハ四、八六三、三七六戸トナリテ之ヲ明治四十一年ニ比スレバ九八、五一%ニ當リ一、四九%ヲ減少シタ。又調査期間ヲ五ケ年宛前後二期ニ區分シテ地主數ノ増減ノ有様ヲ見ルニ、前半期ニ於テ地主ノ減少セシ總數ハ三八、一〇六戸即チ一ケ年平均七、六二一戸ナルニ後半期ニテハ三五、二八七戸即チ一ケ年平均七、〇五七戸デアツテ前半期ニ比シ五六四戸ノ差ガアル。

(二)

斯クノ如ク我が國全體ニ於テハ地主ノ數ハ常ニ減少スル傾向アルガ是ヲ府縣ト北海道トニ分チテ調ブルトキハ全然異ナレル狀態ヲ示ス。府縣ノ地主ハ全國ノ地主ノ大部分ヲ占メ例ヘバ大正七年ニ於テ全國地主總數四、八六三、三七六戸ノ内四、七〇四、五七八戸即チ九六、七三%ハ府縣ニ在ルヲ以テ全國ニ於ケル地主ノ狀態ハ主トシテ府縣ノ夫レニ依リテ左右セラル、ハ言フ俟タナイ。

府縣ニ於テモ全國ノ場合ト等シク明治四十三年ト大正七年ノ二ケ年ニ地主ノ數ヲ増加シタルノミニテ其ノ他ノ年ニ於テハ常ニ之ヲ減少シタ。而カモ全國ノ場合ニ比スレバ増加セシ實數ハ少ナキモ減少セシ戸數ハ更ニ一層多ク差シ引キ

十ヶ年間ニ九八、三一二戸ヲ減少シ一ヶ年平均九、八三一戸ノ減少ヲ示シタ。而シテ前半期ノ減少ハ平均一〇、〇四六戸ニシテ後半期ハ九、六一七戸トナリ明治四十一年ニ比シ大正七年ハ九七、九五%ニ當リ全國ノ割合九八、五一%ナルニ比スレバ〇・五六%ノ差デアル。

府 縣	地 主 數	比 例 數	増 減
明治四十一年	四、八〇二、八九一戸	一〇〇、〇〇〇	(一) 二三、二三六
四十二年	四、七七九、六五五	九九、五二	(一) 一三、〇八〇
四十三年	四、七九二、七三五	九九、七九	(一) 三〇、〇二〇
四十四年	四、七六二、七一五	九九、一六	(一) 四、二二七
大正 元年	四、七五八、四八八	九九、〇八	(一) 五、八二六
二年	四、七五二、六六二	九八、九五	(一) 五〇、二二九
前半期	四、七二五、八三三	九八、四〇	(一) 二六、八二九
大正 三年	四、七一九、二三九	九八、二六	(一) 六、五九四
四年	四、七〇五、一四〇	九七、九六	(一) 一四、〇九九
五年	四、六八七、〇七七	九七、五九	(一) 一八、〇六三
六年	四、七〇四、五七八	九七、九五	(一) 一七、五〇一
七年			(一) 四八、〇八四
後半期			

自明治四十三年
至大正七年

(一)

九八三三三

(三)

府縣ニ於テ十ケ年間ニ九八、三一三戸ヲ減シタルニモ拘ハラズ全國ニ於ケル減少數ハ七三、三九三戸ニ留マリシ所以ハ一ニ北海道ニ於テ地主ノ數ヲ増加シタル爲メデアル。北海道ニ於テハ年ニ依リ數ニ多少ノ差ハアリシモ、十ケ年間ヲ通ジテ一ノ例外ナク常ニ地主ノ數ヲ増加シ、明治四十一年ニハ一三三、八七八戸ナリシモノガ大正七年ニハ二四、九二〇戸ヲ増シテ一五八、七九八戸トナリテ一八、六一%ヲ増加シタ。而シテ前半期ノ一ケ年平均増加數ハ二、四二四戸ニシテ後半期ハ二、五六〇戸デアル。斯ノ如ク北海道ガ府縣ト異ナリタル現象ヲ呈セルハ畢竟北海道ガ新開ノ境地ニシテ開拓未ダ半バナナルガ如キ有様デアルカラデアアルコトハ今更説明スルマデモナイ。

北海道	地主數	比例數	増減
明治四十一年	一三三、八七八戸	一〇〇、〇〇	戸
四十二年	一三六、七八八	一〇二、一七	二、九一〇
四十三年	一四〇、六六四	一〇五、〇七	三、八七六
四十四年	一四一、一五一	一〇五、四三	四八七

大正	元年	一四四、七七〇	一〇八、一四	三、六一九
	二年	一四六、〇〇一	一〇九、〇六	一、二三一
前 半 期				一一、一二三
大正	三年	一四七、五六二	一一〇、三二	一、五六一
	四年	一五一、〇九四	一一二、八六	三、五三二
	五年	一五三、六八九	一一四、八〇	二、五九五
	六年	一五六、〇九〇	一二六、五九	二、四〇一
	七年	一五八、七八九	一二八、六一	二、七〇八
後 半 期				一二、七九七
自明治四十一年 至大正七年				二四、九二〇

(四)

府縣ニ於ケル地主ノ數ノ増減ハ又地方ニ依リテ多少ノ差異ガアル、今府縣ヲ東北關東、北陸、東海、近畿、中國、四國及ビ九州ノ八區ニ區分シ明治四十一年ヨリ大正七年マデノ十ケ年ヲ前後ノ二期ニ分チテ地主數ノ増減ノ有様ヲ見ルニ、只前期ニ於テ關東及ヒ東海ノ二區又後半期ニ於テ北陸及ビ近畿ノ二區ガ地主數ノ増加ヲ示シタルト十ケ年間ニ絶對的ニ其ノ數ヲ増加シタル北陸區トガ異例デアツテ其ノ他ハ何レモ皆ナ其ノ數ヲ減少シタ。

東北區

地主數

增減

關東區地主數

增減

明治四十一年

五〇〇、五四八戸

(一)

四、九二八

九三一、四七一

(一)

八、二三三

大正 二年

四九五、六二〇

(一)

三、一七八

九三九、七〇四

(一)

二二、二八五

七年

四九二、四四二

(一)

八、一〇六

九一七、四一九

(一)

一四、〇五二

自明治四十一年至大正 七年

(一)

(一)

北陸區

四〇二、六五四

(一)

二、七二七

東海區

六二一、六七一

(一)

一、七八九

明治四十一年

三九九、九二七

(一)

一一、一一六

六二三、四六〇

(一)

一六、〇一三

大正 二年

四一一、〇四三

(一)

八、三八九

六〇七、四四七

(一)

一四、二三四

七年

(一)

(一)

自明治四十一年至大正 七年

(一)

(一)

近畿區

五二五、五九九

(一)

九、七三〇

中國區

六二七、三五九

(一)

一一、二一六

明治四十一年

五一五、八六九

(一)

一、七二四

六一五、一四三

(一)

六、六八三

大正 二年

五一七、五九三

(一)

八、〇〇六

六〇八、四六〇

(一)

一八、八九九

七年

(一)

(一)

自明治四十一年至大正 七年

(一)

(一)

四國區

三六〇、六五五

(一)

一八、八三四

九州區

八三三、九三三

(一)

一一、八一五

明治四十一年

三四一、八二一

(一)

八二一、一一八

(一)

大正 二年

(一)

(一)

七年
自明治四十一年
至大正七年

三三四、二六二

(一) 七、五六〇
(二) 二六、三九四

八一五、八七三

(一) 五、二四五
(二) 一七、〇六〇

三 地主ノ種類

(一)

土地所有權ノ移動狀況ヲ知ルガ爲メニハ地主ヲ自營地主及ビ貸附地主ノ二種ニ大別シテ觀察スル必要ガアル。余ノ云フ自營地主トハ地主ガ土地所有者タルト同時ニ農業經營者タルモノデ土地ヲ以テ農業經營ノ一手段トシテ利用スルモノヲ云ヒ。貸附地主トハ土地ヲ以テ單ニ一ノ放資目的物ト看取シ之ヲ他ニ貸シ附ケテ成ル可ク多クノ收入即チ貸地料ヲ收納セントスルモノデ純然タル地主デアツテ農業者デナイ。此ノ二種ノ階級ハ等シク地主デアルケレドモ其ノ性質ハ大ニ異ナツテキル。自營地主ハ農業經營上ヨリ見レバ自作農カ若クハ自作兼小作農デアツテ主トシテ農業經營上ヨリ收益ヲ上ゲルコトニ努力スルモノデアル、勿論一種ノ地主タル以上ハ自己ノ努力以外ノ原因ヨリシテ生ズル土地ノ價格ノ騰貴ニ依ル利益ヲモ受クルモノデアル。然シナガラ貸附地主ガ土地ノ利益上別ニ爲ス所ナクシテ不勞所得ノミヲ獲得スルトハ其ノ趣ヲ異ニシテ居ル。近時農

業界ニ起レル社會問題ノ如キモ多クハ貸附地主ニ關スルモノデアツテ農業界ノ健全ナル發展ヲ計ルガ爲メニハ出來得ル丈ケ貸附地主ヲ減少シテ自營地主ヲ増加セシムベキ策ヲ講ズル必要ガアル、今我が國ニ於ケル土地所有權ノ移動ヲ論ズルニ當リテモ此ノ二種ノ地主階級ガ如何ナル狀態ニアルヤヲ研究スルハ重要ナル問題デアアル勿論自營地主ヲ更ニ詳細ニ觀察スレバ其ノ内ニハ經濟上其ノ他ノ原因ヨリシテ自己ノ所有地ノ全部ヲ自カラ耕作經營セズシテ其ノ一部ヲ他ニ貸シ附テ居ルモノモ含マレ、嚴格ニ言ヘバ自營兼貸附地主トモ稱スベキ兩地主ノ性質ヲ併セ兼ネテ居ルモノモアルカ、貸附地主トハ異ナツテ純然タル地主デアリ又農業者デアルト共ニ我が國ニハ此ノ種ノ階級ヲ區分シ得ベキ統計的資料ヲ欠クガ故ニ今之ヲ自營地主中ニ含マシメテ研究ノ歩ヲ進メル。

(一)

明治四十一年 四十二年 四十三年	地主ノ種類		地主ノ増減	
	自營地主	貸附地主	自營地主	貸附地主
	三、九一六、六三〇戸	一、〇二〇、一三九戸	(一) 六、四一九	(一) 一三、九〇七
	三、九一〇、二二一	一、〇〇六、二三二	(一) 五、七七三	一一、一八三
	三、九一五、九八四	一、〇一七、四一五		

四十四年	大正 元年	二年	前 半 期	大正 三年	四年	五年	六年	七年	後半 期	自明治 四十一年 至大正 七年
三、九一八、〇五九	三、九四〇、二三一	三、九二二、七九六	三、九三五、七五五	三、九二六、九七〇	三、九三二、八〇四	三、九三一、六九五	三、九二六、四六〇			
九八五、八〇七	九六三、〇二七	九七五、八六七	九三七、六四〇	九四三、三六三	九二六、〇二五	九一一、四七二	九三六、九一六			
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)
二、〇七五	二二、一七二	一七、四三五	六、一六六	一二、九五九	八、七八五	五、八三四	一、一〇九	五、二三五	三、六六四	九、八三〇
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)
三一、六〇八	二二、七八〇	一二、八四〇	四四、二七二	三八、二二七	五、七二三	一七、三三八	一四、五五三	二五、四四四	三八、九五一	八三、二二三

明治四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正 元年	二年	三年
一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇
七九、三四	七九、五三	七九、三八	七九、九〇	八〇、三六	八〇、〇八	八〇、七六
二〇、六六	二〇、四七	二〇、六二	二〇、一〇	一九、六四	一九、九二	一九、二四
一〇〇、〇〇	九九、八四	九九、九八	一〇〇、〇四	一〇〇、六〇	一〇〇、一六	一〇〇、四九
一〇〇、〇〇	九八、六四	九九、七三	九六、六四	九四、四〇	九五、六六	九一、九一

四年	五年	六年	七年	八〇、六三	一九、三七	一〇〇、二六	九二、四七
一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	八〇、九四	一九、〇六	一〇〇、四一	九〇、七七
				八一、一八	一八、八二	一〇〇、三八	八九、三五
				八〇、七四	一九、二七	一〇〇、二五	九一、八四

大正七年ニ於ケル地主總數ハ既述セシ通り四、八六三、三七六戸デアアルガ之ヲ自然地主ト貸附地主ノ二種ニ分テハ前者ハ三、九二六、四六〇戸即チ八〇、七四%デ後者ハ九三六、九一六戸即チ一九、二七%デアアル。前者ハ後者ノ四倍ニ相當スル。即チ四ニ對スル一ノ有様デアツテ數ノ上ヨリ見レバ幸ニ自營地主ハ貸附地主ヨリ遙カニ多イ。然シ面積ノ上ヨリ之ヲ論ズレバ我國ニ於ケル耕地總面積六、〇一七、六八〇、三町步ノ内自營地ハ三、二四七、九八五町步貸附地ハ二、七六九、六九九、八町步ニシテ五四%ト四六%トノ割合デアツテ其ノ差ハ僅ニ四七八、二八一、七町步即總面積ノ八%ニ過ギナイ。勿論此ノ貸附地ノ面積中ニハ純然タル貸附地主ノ所有地ノ外ニ自營地主ニシテ所有地ノ一部ヲ他ニ貸附ケタルモノヲモ含ンデ居ル。之ヲ北米合衆國ノ例ニ照シ合スニ一九〇〇年ノ國勢調査ノ結果ニ依レバ自作農場ノ數三、七一三、三七一アル。若シ假リニ一人ニシテ一農場ヲ所有スルモノトセバ前記ノ農場數ハ即チ自營地主ノ數デアアル。而シテ貸附農場ノ所有者ガ一、二五七、

七一六人ナル故總數四、九七一、〇八七人ノ内七四、七%ト二五、三%ノ割合トナリ地主ノ數ノ上ヨリ見レバ我が國ノ方ガ稍良好ナル狀態デアル。然ルニ米國ニテハ自營地(監督農地ヲ含ム)ハ六四三、五五八、二三七英町步デ貸附地ハ一九五、〇三三、五三七英町即チ七六、七%ニ對スル二三、三%ノ割合デ我が國ニ於ケル兩者ノ差頗ル大ニシテ貸附地ハ自營地ノ約三分ノ一ニ過ギナイ。此ノ點ニ於テハ我が國ノ狀況ハ遙カニ米國ノ夫レニ比シテ劣ツテ居ル。

〔三〕

而シテ過去十ケ年間ニ於ケル自營地主及ビ貸附地主ノ増減ノ有様ヲ見ルニ何レモ年ニ依リテ一増一減アルモ此等兩階級ハ互ニ其ノ狀況ヲ異ニシテ居ル。自營地主ニテハ十ケ年間ニ前年ト比シ其ノ數ヲ増加セシ年ト減少セシ年トハ互ニ相半バスルモ貸附地主ニテハ其ノ數ヲ減少セシ年ハ七回ニシテ増加セシ年ハ僅ニ三回デアツタ。隨テ自營地主ニテハ前半期ニ於テ六、一六六戸後半期ニ於テ三、六六四戸合計九、八三〇戸ヲ増加シタルニ反シ、貸附地主ニテハ前半期ニ四四、二七二戸後半期ニ三八、九五一戸合計八三、二二三戸ヲ減少シタ。若シ明治四十一年ノ自營地主ノ數ヲ一〇〇トナセバ明治四十二年及ヒ同四十三年ノ二ケ年ノミハ一

〇〇%以下ナリト雖モ其ノ以後ノ八ケ年ハ何レモ常ニ一〇〇%以上ニシテ大正七年ニハ一〇〇、二五%トナレルニ、貸附地主ニテハ明治四十一年ノ一〇〇%對シ其ノ以後ノ十ケ年ハ何レモ皆一〇〇%以下ニシテ大正六年ノ如キハ九〇%臺ヲ下リテ八九、三五%トナリ、大正七年ハ稍少シク其ノ割合ヲ上シタルモ尙九一、八四%ニ過ギズシテ、之ヲ明治四十一年ニ比スレバ八、一六%ノ差ヲ生ジタ。隨テ地主中自營地主ハ明治四十一年ニハ七九、三四%ナリシモノガ大正七年ニハ曩ニ述ベシ如ク八〇、七四%ニ増シ、貸附地主ハ同一期間ニ二〇、六六%ヨリ一九、二六%ニ減少シタ。是ニ由ツテ之ヲ見レバ過去十ケ年間ニ於テ自營地主ハ實數ニ於テモ亦比例數ニ於テモ共ニ増加セシニ反シ貸附地主ハ兩者共ニ減少シタ。然シナガラ自然地主ノ増加數ハ貸附地主ノ減少數ヲ償フコト出來ザリシ結果トシテ遂ニ地主ノ總數ニ於テハ減少ヲ示スニ至ツタ。是レ即チ農業者以外ノモノニシテ農業地ニ放資スルモノ、數ヲ減少シタ證據デアル。

〔四〕

然シナガラ自營地主ト貸附地主トノ關係ハ府縣ト北海道トニ於テ色々其ノ趣ヲ異ニシテ居ル。左表ハ、之ヲ示ス

府 縣

府 縣	地主ノ種類	自營地主	貸附地主
明治四十一年	三、八二七、一〇四戸	九七五、七八七戸	(一) 五、八二六
四十二年	三、八二一、二七八	九五八、三七七	(一) 六、〇三八
四十三年	三、八二七、三一六	九六五、四一九	(一) 七、八
四十四年	三、八二七、二三八	九三五、四七七	(一) 二一、二七三
大正 元年	三、八四八、五一一	九〇九、九七七	(一) 一八、九四〇
二年	三、八二九、五七一	九二三、〇九一	(一) 二、四六七
前半期			(一) 九、二九八
大正 三年	三、八三八、八六九	八八六、九六四	(一) 二九五
四年	三、八三八、五七四	八九〇、六六五	(一) 五、六六二
五年	三、八三二、九一二	八七二、二二八	(一) 五、五七〇
六年	三、八二七、三四二	八五九、七三五	(一) 八、七三六
七年	三、八一八、六〇六	八八五、九七二	(一) 一〇、九六五
後半期			(一) 八、四九八
自明治四十一年至大正七年			(一) 八九、八一五

地 主

自營地主

貸附地主

自營地主

貸附地主

明治四十一年

四十二年

一〇〇、〇〇〇

七九、六八

二〇、三二

一〇〇、〇〇〇

一〇〇、〇〇〇

第三十一卷

(一五) 論 説

我が國ニ於ケル土地所有權ノ移動

第一號

一五

大正 四十四年	大正 四十四年	大正 元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
七九、八八六	八〇、三六	八〇、八八	八〇、五八	八一、二三	八一、三四	八一、四六	八一、六六	八一、一七
二〇、一四	一九、六四	一九、一二	一九、四二	一八、七七	一八、六六	一八、五四	一八、三四	一八、八三
一〇〇、〇〇一	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、五六	一〇〇、〇〇六	一〇〇、三一	一〇〇、三〇	一〇〇、一五	一〇〇、〇一	九九、七八
九八、九四	九五、八七	九三、二六	九四、六〇	九〇、九〇	九一、二八	八九、三九	八八、一一	九〇、八〇

北海道

明治四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正 元年	二年	前半期	大正 三年
八九、五二六戸	八八、九三三	八八、六六八	九〇、八二一	九一、七二〇	九三、二二五	九六、八八六	九六、八八六
四四、三五二戸	四七、八五五	五一、九九六	五〇、三三〇	五三、〇五〇	五二、七七六	五〇、六七六	五〇、六七六
(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)	(一)
五九三	二六五	二、一五三	八九九	一、五〇五	三、六九九	三、六六一	三、六六一
三、五〇三	四、一四一	一、六六六	二、七二〇	二、七四	八、四二四	二、一〇〇	二、一〇〇

四年	五年	六年	七年	後半期	自明治四十一年 至大正七年
九八、三九六	九九、八九二	一〇四、三五三	一〇七、八五四		
五二、六九八	五三、七九七	五、七三七	五〇、九四四		
一、五一〇	一、四九六	四、四六一	三、五〇一	一四、六二九	一八、三二八
二、〇三二	一、〇九九	二、〇六〇	七九三	一、八三二	六、五九二

明治四十一年	四十二年	四十三年	四十四年	大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年
一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇	一〇〇、〇〇
六六、八七	六五、〇二	六三、〇四	六四、三四	六三、三六	六三、八五	六五、六六	六五、一二	六五、〇〇	六六、八五	六七、九二
三三、一三	三四、九八	三六、九六	三五、六六	三六、六四	三六、一五	三四、三四	三四、八八	三五、〇〇	三三、一五	三二、〇八
一〇〇、〇〇	九九、三四	九九、〇四	一〇一、四五	一〇二、四五	一〇四、一三	一〇八、二二	一〇九、九一	一一一、五八	一一六、五六	一二〇、四七
一〇〇、〇〇	一〇七、九〇	一一七、二三	一一三、四八	一一九、六一	一一八、九九	一一四、二六	一一八、八二	一二一、三〇	一二六、六五	一二四、八六

前表ニ依ルトキハ

一、自營地主ノ貸附地主ヨリ多數ナルコトハ北海道ニ於テモ亦府縣ニ在テモ別ニ變リナキモ、此ノ兩階級ノ相互ノ割合ニ於テハ然ラズデアル。府縣ニ於テハ全國ノ場合ト餘リ大差ナク、寧ロ貸附地主ノ割合ハ稍低ク大正七年ノ如キ自營地主ノ八一、一七%ニ對シ貸附地主ハ一八、八三%ニシテ兩者ノ差ハ六二、三四%デアル。然ルニ北海道ニ於テハ自營地主ノ六七、九二%ニ對シ貸附地主ハ三二、〇八%ニシテ其ノ差三五、八四%ニ過ギナイ。過去十ヶ年間ニ北海道ニ於テ貸附地主ノ割合ノ最モ多カリシ明治四十一年ノ三六、九六%ヲ以テ府縣ニ於テ此種地主ノ最モ少ナカリシ大正六年ノ一八、三四%ニ比スレバ實ニ二倍ヲ少シク超過スル。府縣ニテハ貸附地主ハ概シテ總地主ノ五分ノ一以下ナルニ北海道ニテハ三分ノ一以上デアル。北海道ニ於テ斯クノ如ク貸附地主ノ多キ結果ハ自カラ小作農ノ數ヲ増加シ遂ニ農業經營者中小作農ノ割合ノ多キ全國ニ於テ香川及ビ鳥取ノ二縣ニ次ギテ第三位ヲ占ムルニ至ラシメタ。開拓ニ着手シテヨリ未タ多クノ歲月ヲ經過セズ比較的容易ニ土地ヲ獲得シ得可キ北海道ニ於テ斯クノ如キ現象ヲ呈スルハ一面ヨリ觀察スレバ矛盾ノ至リナリト言ハネバナラス。然シナガラ之レ從來政府當局者ノ採レル拓殖政策ノ結果デアツテ決シテ一朝一夕ニ起ツタモノデナク拓

殖ノ根本政策ニシテ改善セラレザル間ハ好マシカラザル此ノ現象ハ將來モ尙繼續スルデアラウ。

一、過去十ケ年間ニ於ケル自營地主ト貸附地主トノ増減ノ蹟ヲ査スルニ、明治四十一年ヲ以テ大正七年ニ比較スレバ北海道ニテハ自營地主ハ八九、五二六戸ヨリ一八、三二八戸ヲ増加シテ一〇七、八五四戸トナリ、一〇〇ニ對スル一二〇、四七%ノ割合デ二割以上ノ増加デアアル。貸附地主モ亦四四、三五二戸ヨリ六、五九二戸ヲ増シテ五〇、九四四戸トナリ、増加ノ割合ハ自營地主ニ及バザルモ尙一〇〇ニ對シ一四、八六%トナツタ。之ニ反シテ府縣ニテハ同一期間ニ自營地主ハ三、八二七、一〇四戸ヨリ三、八一八、六一六戸トナリテ八、四九八戸ヲ減ジ、貸附地主モ亦九七五、七八七戸ヨリ八八五、九七二戸トナリテ八九、八一五戸ヲ減ジ九〇、八%トナツタ。曩キニ述ベタル全國ニテ自營地主ノ増加シタルハ北海道ニ於ケル此ノ種階級ノ地主ノ増加シタル結果デアツテ、貸附地主ハ北海道ニ於テハ増加セシモ府縣ニ於テ著シタ其ノ數ヲ減少シ北海道ニ於ケル増加ヲ以テシテモ之ヲ償フコト出來ザリシ爲メ、遂ニ全國ニ於テハ貸附地主ノ數ノ減少ヲ來シタモノデアアルコトヲ證明スル。

一、尙稍詳シク此ノ間ノ變遷ノ狀態ヲ觀察スレバ、自營地主ハ北海道ニテハ明治四十二年ト同四十三年ノ二ケ年ニ於テ其ノ數ヲ減少セシノミデ其ノ後ハ年ト共ニ漸次其ノ數ヲ増加シ、前半期ニ於テ三、六九九戸後半期ニ於テ一四、六二九戸ヲ増シタ。然ルニ府縣ニテハ前半期ニ於テ明治四十三年及ビ大正元年ノ外殘リノ三ケ年間ハ其ノ數ヲ減ジ、後半期ニ於テハ獨リ大正三年ガ前年ニ比シ其ノ數ヲ増シタルノミニシテ其ノ後ノ四ケ年間ハ次第ニ其ノ數ヲ減シ遂ニ大正七年ニハ明治四十一年ヨリモ少數トナツタ。貸附地主ニ至リテハ北海道ニ於テモ自營地主ノ如ク規則正シク増加セズ十ケ年間其ノ數ノ増加セシ年ト減少セシ年トハ互ニ相半バシ、前半期ニ於テハ八、四二四戸ヲ増加シタルニ反シ後半期ニ於テハ却ツテ一八三二戸ヲ減少シタルモ十ケ年ヲ通ズレバ六、五九二戸ノ増加トナツタ。而シテ府縣ニ於テハ前半期ニ五二、六九六戸ヲ減少シ後半期ニ稍減少ノ程度ヲ緩和セシガ尙三七、一一九戸ノ減少戸數ヲ示シテ居ル。

〔五〕

更ニ府縣ヲ東北外七區ニ區分シテ自營地主ト貸附地主トノ増減ノ狀況ヲ調ブレバ次表ノ通りデアル。

東北區

地 主 戸	地主ノ種額		地 主 戸	地主ノ増減	
	自營地主 戸	貸附地主 戸		自營地主 戸	貸附地主 戸
明治四十一年	五〇〇、五四八	一〇八、五九二	四、九二八(一)	二、一九二(一)	二、七三七
大正 二年	四九五、六二〇	一〇五、八五五		一四、四四三(一)	一七、六二一
七年	四九二、四四二	八八、二三四	三、一七八	一二、二五二(一)	二〇、三五八
自明治四十一年至大正 七年	四〇四、二〇八	(一)	八、一〇六	(一)	(一)

關東區

地 主 戸	地主ノ種額		地 主 戸	地主ノ増減	
	自營地主 戸	貸附地主 戸		自營地主 戸	貸附地主 戸
明治四十一年	九三一、四七一	一七九、三一七	八、二三三	一〇、五九九(一)	二、三六六
大正 二年	九三九、七〇四	一七六、九五二		一、五〇五(一)	二、三、七九〇
七年	九一七、四一九	一五三、一六一	(一)二二、二八五	(一)二、一〇四(一)	二六、一五六
自明治四十一年至大正 七年	七六四、二五八	(一)	(一)一四、〇五二	(一)	(一)

北陸區

地 主 戸	地主ノ種額		地 主 戸	地主ノ増減	
	自營地主 戸	貸附地主 戸		自營地主 戸	貸附地主 戸
明治四十一年	四〇二、六五四	九六、三九五	二、七二七(一)	一、五七三(一)	一、一五四
大正 二年	三九九、九二七	九四、二四一		六、四二五	四、六九一
七年	四一一、〇四三	九九、九三二	一一、一六	四、八五二	三、五三七
自明治四十一年至大正 七年	三一一、一一一	(一)	八、三八九	(一)	(一)

東海區

明治四十一年

六二一、六七一

五〇七、〇四四

一一三、六二七

大正 二年

六二三、四六〇

五一五、五八〇

一〇七、八八〇

一、七八九

八、五三六(一)

五、七四七

七年

六〇七、四四七

五一〇、一五八

九七、二八九

(一)一六、〇一三(一)

五、四二三(一)

一〇、五九一

自明治四十一年
至大正 七年

(一)一四、二二六

三、一四(一)

一六、三四〇

近畿區

明治四十一年

五二五、五九九

三九八、七二八

一二六、八七一

(一)九、七三〇(一)

二、四九五(一)

七、二三五

大正 二年

五一五、八六九

三九六、二三三

一一九、六三六(一)

(一)九、七三〇(一)

二、四九五(一)

七、二三五

七年

五一七、五九三

三八九、〇四七

一二八、五四六

(一)一、七二四(一)

七、一八六

八、九一〇

自明治四十一年
至大正 七年

(一)八、〇〇六(一)

九、六八一

一、六七五

中國區

明治四十一年

六二七、三五九

五〇〇、八一三

一二六、五四六

(一)一二、二一六

三、六七二(一)

一五、八八八

大正 二年

六一五、一四三

五〇四、四八五

一一〇、六五八(一)

(一)一、二二六

三、六七二(一)

一五、八八八

七年

六〇八、四六〇

五〇五、四一九

一〇三、〇四一(一)

(一)六、六八三

九、三四(一)

七、六一七

自明治四十一年
至大正 七年

(一)一八、八九九

四、六〇六(一)

二、三五〇五

四國區

明治四十一年

三六〇、六五五

二九四、九七八

六五、六七七

(一)一八、八三四(一)

二、三、二六四

四、四三〇

大正 二年

三四一、八二一

二七一、七一四

七〇、一〇七(一)

(一)一八、八三四(一)

二、三、二六四

四、四三〇

七年

三三四、二六一

二六八、二四三

六六、〇一八

(一)七、五六〇(一)

三、四七一(一)

四、〇八九

自明治四十一年
至大正 七年

(一)二六、三九四(一)

二、六、七三五

三、四一

九州區

明治四十一年

八三二、九三三

六七五、一七二

一五七、七六一

(一) 一一、八一五

九、一八三 (一) 二〇、九九八

大正 二年

八二一、一一八

六八四、三五五

一三六、七六三

(一) 一一、八一五

九、一八三 (一) 二〇、九九八

七年

八一五、八七三

六六六、一六二

一四九、七一

(一) 五、二四五

(一) 一八、一九三 一二、九四八

自明治四十一年
至大正 七年

(一) 一七、〇六〇

(一) 九、〇一〇 (一) 八、〇五〇

府 縣

明治四十一年

四、八〇二、八九一三、八二七、一〇四

九七五、七八七

(一) 五〇、二二九

二、四六七 (一) 五二、六九六

大正 二年

四、七五二、六六二、八二九、五七一

九二二、〇九一

(一) 五〇、二二九

二、四六七 (一) 五二、六九六

七年

四、七〇四、五七八三、八一八、六〇六

八八五、九七二

(一) 四八、〇八四

(一) 一〇、九六五 (一) 三七、一一九

自明治四十一年
至大正 七年

(一) 九八、三一三

(一) 八、四九八 (一) 八九、八一五

前表ニ依レバ左ノ事實ヲ認メルコトガ出來ル即チ

一、 既往十ケ年間に自營地主ノ數ノ増加セシ區域ハ東北、關東、北陸、東海及ヒ中國ノ五區ニシテ近畿四國及ヒ九州ノ三區ニ於テハ減少シタ。區ノ數ヨリ見レバ其ノ數ヲ増加セシモノ多キモ府縣全體ニ於テハ却ツテ自營地主ヲ減少セシ所以ハ畢竟前記三區ニ於ケル自營地主ノ減少數が大ナリシガ爲メデアル、就中四國ニ於ケル自營地主ノ減少ガ其ノ主ナル因ヲナシテ居ル。

一、 自營地主ガ前半期及ビ後半期共ニ其ノ數ヲ増加シタルハ關東及ヒ中國ノ二

區ニシテ二期共ニ減少セシハ近畿及ビ四國ノ二區デアル。其ノ他ノ四區ノ内東北及ビ北陸ニテハ前半期ニ減少セシモ後半期ニ増加シテ能ク前半期ノ減少數ヲ償フヲ得。東海及ビ九州ハ之ト反對ニ前半期ニ増加シタルモ後半期ニ至リテ減少シタ。然シ東海ニテハ後半期ノ減少ノ程度前半期ノ増加ニ及バザリシヲ以テ十ヶ年間ニ其ノ數ヲ増加スルコト、ナリタルモ、九州ニテハ後半期ノ減少數大ナリシ爲メ之ト反對ノ現象ヲ呈シタ、而シテ八區中府縣全體ト其ノ狀態ヲ等フスルモノハ獨リ九州ノミナルハ奇ナリト稱シテ可ナリデアル。

一、貸附地主ニ至リテハ自營地主ト異ナリ前後兩期共ニ其ノ數ヲ増加セシ地方ハナク、却ツテ其ノ數ヲ減少シ府縣全體ト其ノ趣ヲ等フスルモノハ東北、關東、東海及ビ中國ノ四區ノ多キニ上ツテ居ル。其ノ他北陸、近畿及ビ九州ニテハ前半期ニ減少シテ後半期ニ増加シ獨リ四國ノミハ其ノ反對デアル。而シテ此等四區ノ内前後兩期ノ増減ヲ差引キテ北陸、近畿及ビ四國ノ三區ニテハ貸附地主數増加セシモ九州ニテハ却ツテ減少シタ。斯クシテ八區ノ内五區ニテハ其數ヲ減少スルコト、ナリテ貸附地主ノ減少ハアル少數ノ地方ニ局限セラル、ノデナク廣キニ互リテ認ムル現象デアル。(未完)